

同志社人物誌 (62)

元良勇次郎

佐野安仁

同志社最初の入学生

同志社英学校が開校された一八七五（明治八年）、一番先に入学したのが、元良（杉田）勇次郎（一八五八—一九二二）であった。その翌年（明治九）に入学した熊本バンドの青年たちによって同志社は活気をおび、学校としての基盤が形成されたことはよく知られている。この熊本バンドの青年たちの多くは、キリスト教を文明開化の基礎であると考へ神学に傾注し、やがてわが国プロテスタント・キリスト教の伝道に開拓的な役割を果し、同志社の特色を鮮明にした。この点で、一般的に

同志社最初の入学生は、熊本バンドの一団をもって代表されがちである。だが開校と同時に真先に入学した元良勇次郎の存在を看過してはならない。

元良は、熊本バンドの一団とは異なり神学には距離をおき、地質学、心理学、物理学の学習に傾注し、とりわけ、W・B・カーペンターの『精神生理学』に関心をもち、しばしば奇抜な科学実験を試みていた。同志社でのこのような学習が、元良の将来の方針を定めることになり、のちに文科大学（東京大学の前身）心理学講座の最初の教官となって（明

治二一年）、わが国心理学の研究に先登として独自の学風を樹立した。

明治八年には元良に続いて中島力造（一八五八—一九一八）も同志社に入学している。中島は福知山の出身であり、三田出身の元良とはお互に郷里の話を通して懇意になり、勉学上でも二人は親しい仲間であった。中島も宗教には関心を示さず、ひたすら哲学、倫理学を通して西洋の学問に熱中していた。のちに元良と同じ文科大学の教授として倫理学の講座を担当し、わが国の倫理学研究に先駆者として貢献した。

元良と中島は、熊本バンドの一団が、しばしば集会を開き、世間の風潮を批判し、このままでは日本の将来は危いと云って気焰を吐いていたのに対し、それにはあまり同調しなかった。新島襄は、そんな二人に教会だけでは出席するようにと奨励したが、それ以外には、どんな干渉もしなかったようである。というのは、元良が物理学などのむずかしい問題を質問して、新島をしばしば困らせるほどに、つねに自修独学していることを、また中島も学問に極めて熱心であることを知っていたからである。そのような新島を元良は、



右から、元良勇次郎、長田時行、和田正節
1882(明治15)年ごろ

「なんとなく愉快な感を与える人であった」と好感をもって彼の人格を賞揚している。
熊本バンドの一人であった海老名弾正が「何等の素養なき青年の烏合しているのみ」の集団に「元良や中島の如き青年が潜んでいるのは不思議と云はねばならぬ」と驚きを示すほどに勉強家であった二人は、前述のように文科大学の「心理学倫理学論理学」の講座の土台づくりに重責を負うことになった。
元良は哲学科第一講座の心理学を、中島は第二講座の倫理学を担当し、わが国学術の開拓に献身し、大きな役割を果たした。こうした学

術上の泰斗を草創期の同志社は多く輩出し、明治期の学術振興に貢献している。この点に同志社のもう一つの特色があったことをのみがしてはならない。

同志社入学に至るまで

元良は父杉田泰、母寿賀の二男として一八五八(安政五)年十一月一日に摂津(兵庫県)三田にて誕生した。杉田家は、代々藩主九鬼家に臣事していた。父泰は藩校の教師であり儒学者としても高名であった。兄の杉田潮は一八八四(明治一七)年に大西祝らと同志社を卒業し、安中教会、浪花教会に牧師として歴任し、牧会に献身した。弟の平四郎は、東京英和学校を卒業し、のちに山口中学校の校長となり教育界に尽した。妹の真は、梅花女学校の最初の入学生であり、のちに、大阪天満教会の牧師となった長田時行と結婚した。

杉田家は廃藩の結果、政府よりの公債で家屋を購入し、田地を求め、帰農して生計を辛

うじて支えていた。父泰は、元良が一五歳のとき(明治五年)に没し、以後、母寿賀が一家を扶養することになった。したがって杉田家子女の修学は、極めて厳しいものであった。寿賀は、生活の困窮にもかかわらず、子女の向学心をかなえてやりたいと願い、そのために、まず、子女に苦学自立の道を志向させようとした。つまり、自助、自活による修学の道を選択させたのである。

元良は、七歳で藩校造士館に入学。一二歳のとき兵庫に出て広見多聞の寺子屋に学び、さらに一三歳から一五歳にいたる期間に川本清二郎、川本幸民に師事し英語、数学を学んだ。父を失った一八七二(明治五年)、哀傷のさなかに、有馬にて休養中のJ・D・デイヴィスと出会い、彼の説教を聞く機会を得て、キリスト教に傾倒しはじめた。一六歳にいたり神戸に出てデイヴィスの書生となり、キリスト教にも関心を深め、一八七四(明治七年)五月三十一日、摂津第一公会(神戸教会)にてデイヴィスより洗礼を受けた。一六歳から一八歳にいたる三年間は比較的キリスト教に熱心な時期であった。

一八七五(明治八年)、同志社創設に奔走し



前列右から、夫人米子、次女静子、母寿賀子、後列右から、二番目元良勇次郎 1910(明治43)年

ていた新島襄に協力するためドイツは京都に転居した。そのとき元良もドイツとともに京都に同行し、書生として自活しつつ、同志社開校の運びとなるや第一回の入学生となり、ドイツ宅より通学することになった。

同志社時代から米國留学期まで

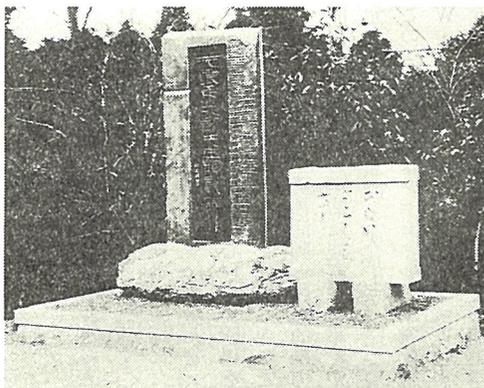
同志社時代に元良は、新島から数学を、J・ギューリックから生物学、進化論を学んだ。前述の中島力造の回顧談によれば、元良が同志社で心服した教師はギューリックであり、最も愛読した書物は、S・スマイルスの『自助論』とW・B・カーペンターの『精神生理学原理』であった。同志社修学期は元良にとって最も厳しい苦学の日々であった。母寿賀は、困窮のなかで元良の生活を精神的に支えた。母親の大きな薫陶により、元良はつねに「自助」に心がけた。したがって彼の学習は、まさに「自修独学」であった。ガノーの物理学に関しては新島も及ばぬほどの学力を、また精神生理学についても独学でかなりの学識を修得した。同志社時代におけるこのような学習は後の米國留学によって一段と深められる。

元良は、一八七九(明治一二)年の春、津田仙の要請により学農社に移り、教鞭をとることになった。したがって彼は同志社の第一回卒業生のなかに名を連ねていない。学農社で元良は、数学と英語を教え、また日曜日には聖書の講義もした。上京当初は上野栄三郎と

居を同じくし、やがて小崎弘道と共に生活するようになった。一八八一(明治一四)年に、津田の懇請で和田正幾らと耕教学舎の運営維持にあたることになった。耕教学舎は、のちに青山学院と改められるが、元良は、一八八三(明治一六)年八月宣教師ソーパーの帰国に同道して渡米するまで耕教学舎の運営と教授を担当し、青山学院の草創に尽力した。

その間、一八八一(明治一四)年六月、津田仙の媒妁で海岸女学校出身(青山学院)の元良与年(よね)と結婚し、元良家の養子となり転籍改姓した。この結婚式は小崎弘道の結婚式と同時に同じ場所でおこなわれた。津田は元良だけでなく小崎にも海岸女学校出身の岩村千代を紹介し、二組の結婚式を同時に挙げたのである。元良は、このとき津田の要請を入れてメソヂスト派に転会した。岩村千代は小崎と結婚して組合派に転会したが、これも津田の配慮であった。

元良は、学農社、耕教学舎に在職中も精神生理学に熱心であり、その研究成果を『七一雑報』や小崎が主宰した『六合雜誌』に投稿している。渡米に至るまでに彼は、『六合雜誌』に「『バクテリア』微菌ノ一種ノ説」



元良勇次郎顕彰碑

と題するテンケルト述を抄訳し、微生物の人間生活に対する実益を紹介している。また「動物喫食の説」と題する論文を投稿し、進化論に関する見解を発表している。この頃の元良は、生物学に関心をもって、いたようである。そうした関心をいदैいて一八八三（明治一六）年に元良は、渡米しボストン大学に入學した。ボストン大学では二年間、ロツツェ派のB・B・バウンに師事し哲学を学んだが、元良にとっては、失望することが多く、一八

八五（明治一八）年一〇月、ジョンズ・ホプキンス大学に転入した。

元良が米国において研究に没頭し、その実りを得たのは、ジョンズ・ホプキンス大学での三年間であった。彼はスタンレー・ホールに師事し、心理学の研鑽をつみ、心理作用の実験的研究に熱中した。その学力は周囲にも認められ、学費の給付を受けることになった。また、特別研究員としてスタンレー・ホールと共同研究に取りくむことになり、その成果が、『米国心理学雑誌』の第一号（一八八八年）に掲載された。それは「庄の漸次変化に対する皮膚の感受性」と題する研究であった。こうした研究において元良に大きな影響を与えたのは、G・T・フェヒネルの精神物理学であった。元良はフェヒネルの実験的方法に着目し、それを自分の研究手法の基礎とした。元良が留学中のジョンズ・ホプキンス大学には、渡瀬庄三郎、新渡戸稲造、佐藤昌介、長瀬鳳輔、西郷菊次郎が勉学していた。その中で元良と新渡戸は英会話に苦勞していたようである。その元良が、あるとき牧師の依頼により日曜の説教をした。長瀬鳳輔は、果して言葉が通ずるだろうかと心配していた。説

教の要旨は「教会は須らく心の中に在らねばならぬ、若し心の中に教会が出来たならば将来はかくの如く日曜に限って会堂に集る必要が無くなら、常に教会の中に在ることが出来る」ということであった。これを聞いた婦人たちの中から、「これは破壊主義だ」という声が出た。長瀬は、元良の英語がかなり通じたことに安心し、彼らしい説教であったと語っている。

文科大学時代から終焉まで

一八八八（明治二二）年、六月ph・Dの学位を受け、七月に帰国した元良は、青山学院（当時の東京英和学校）に復職した。また同時に文科大学の講師に就任し、同大学での最初の心理学担当者となった。一八八九（明治二二）年、進化論をめぐって宣教師と対立した元良は、青山学院を辞し、外山正一、神田乃武とともに正則中学校を設立し、その運営に従事することになったが、翌年（明治二三）に文科大学の教授となり、前述のように中島力造らとその大学の充実、発展に貢献した。一八九一（明治二四）年には文学博士の学位を授与された。元良は、教師養成のため高等師範

学校の教授も兼任していた。また修身教科書調査委員や国語調査委員となって学校教育の面でも学識を発揮している。さらに自らの研究を世界に問うために一九〇五(明治三八年)、ローマで開催された万国心理学会議に参加し「東洋哲学における自我の觀念」と題する研究を発表している。その後、帝国学士院会員にもなり多くの研究業績を残し、一九一二(大正元年)二月一三日、丹毒症のため学者としての生涯を終え、この世を去った。享年五五歳であった。

東京帝国大学の教授として生涯を終えた元良の本領は、いうまでもなく心理学であった。とりわけ、実験心理学の創始、開拓にたいする貢献は大きい。その一つは一八九七(明治三〇)年、わが国最初の心理学実験場を設置したことである。また、注目すべきことは、「実験主義に基き精神活動と物理的勢力とを併行して、之を力学的に観察する事」から、元良独自の「心元説」を大成したことである。この「心元説」はフエヒネルの精神物理学やW・ジェームズのプラグマティズムの影響をうけてはいるが、「実験的方法と形而上学的思

索とを兼ね完うせんと期せし」もので、わが国心理学の草創期において画期的な研究であった。

元良の研究成果はそのつど『哲学雑誌』『心理研究』『神経学雑誌』『六合雜誌』などに数多く発表されている。主著としては一八九〇(明治二三)年、心理学新風の先登として出版された『心理学』(金港堂、一九〇七年(明治四〇)年の『心理学綱要』(弘道館)、一九一五(大正四年)年に編集された『心理学概論』(玉文館)などがある。こうした心理学研究に加えて、一八九二(明治二五)年には『萬国史綱』(家長豊吉と共著、一八九三(明治二六)年に『倫理学』(富山房)が出版されており、さらに『中等教育倫理語話』(一九〇〇)年、や井上哲次郎との共著による『哲学字彙』(一九一一年)などの著書も多く出版されている。

元良はこうした研究の合間に世界の學術の動向についても紹介している。そのうち『六合雜誌』(明治二年)に掲載された「米國心理学の近況」はJ・デュイイの『心理学』についての紹介であり、これによってわが国にデュイイの名がはじめて知らされた。また明

治二四年には「ゼームス氏心理学を読む」と題してジェームズを紹介している。なおデュイイの倫理学を最初(明治三年)に紹介したのは中島力造であった。

さて、元良は、大学において自らの研究と同時に後進の指導にも、人格的感化を及ぼした。彼は苦学の辛慘を嘗め、自助、自活に生きた経験から、後進の指導には、つねに切実な同情を懐き、熱誠をもってそれに当った。その後進のなかに同志社で学び、京都大学初代の心理学の教授になった松本亦太郎がいた。

元良は他人と真理を討議するに当っては虚心坦懐で後進、先輩の別なく「一毫の真理も之を明にせん」とした。後進の姉崎正治は、こうした元良を「実に公平なる学者の態度」として賞揚し、それを新島襄による感化とみており、また「幼年壮年期に於る自己の辛苦より得來りし同情心と、その間における忍耐修養の結果に出でたるもの」と追懐している。

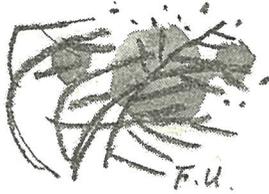
学者としての一生を貫徹し、五五歳を一期として長逝した元良の葬儀(大正元年二月一六日)は、メソヂスト派の杉原成美牧師の司会で行なわれたが、祈禱は小崎直道が、説

教は海老名弾正が行なっている。元良の終焉を同志社時代の朋輩も追慕してやまなかった。

参考文献

「故元良博士追悼學術講演會編『元良博士と現代の心理学』弘道館大正二年城戸俊太郎『心理学問題史』岩波書店昭和四三年

（現在同志社大学の心理学研究は元良の学風を継承しており、また元良によって紹介されたデューイに関してはデューイ文庫を設けて、若い学徒がこれを活用している。）
（大学文学部教授）



新島襄の掛軸の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に接する機会は少なく、せめて複製された掛軸でも欲しいとのご要望に応えて、影本を、三点作成頒布しています。

この影本は、新島襄が元治元年、函館からの脱国に成功した後、航海日記に書きとめられた漢詩および明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎掛軸（影本）

一幅 八〇〇〇円（送料三五〇円）

（H）「男子決志馳千里 自嘗苦辛豈思家
却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花」



慶応元年三月ワイルド・ロウヴァー
一号船上の作品を明治一六年正月
改めて浄書された。

（I）「不止月下併能越 跋涉八州是
我分 壯図却促男兒淚 滴々
灑為緜々文」

明治二二年一二月新潟伝道に従事して
いた卒業生広津友信におくられた詩。

（J）「いしかねも透れかしとて一筋に
射る矢にこむる大丈夫の意地」
明治二三年一月五日「送歳の詩」と同
様大磯百足屋で詠まれた和歌。

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込みください。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

◎ 製作日数の関係で、納品が一カ月程度遅れる場合があります。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話（〇七五）二五一—三〇三七・八